

SIIT 派遣報告書

物質環境システム工学科 2 年 山木 桃子

1). 動機

受験勉強の緊張感から解き放たれた 1 年の後半あたりから、勉強に対する意欲が落ち、また、卒業後という未来のビジョンが描けず、不安を抱え、戸惑いがありました。何らかの刺激を得てこの突破口としたいと思い、留学生に立候補しました。

2). 生活及び活動

- ・ 出来事 (個人的)
- 6 月
 - ・ タイ入国
 - ・ 国王即位 60 年式典
 - ・ 講義開始
 - ・ シリントーン王女来校・バンカディー校舎完成記念式典
(Asian Games の寮を出て Na MO Tho mansion へ)
- 8 月
 - ・ mid-term exam
 - ・ ビザ更新
- 9 月 (インフルエンザで入院)
- 10 月
 - ・ final-exam
 - ・ 帰国

3). 留学生活を通して

ある程度覚悟をしていたこととはいえ、到着してより気候の違い、暑さと、言葉の違い、英語が殆ど通じないこと、それから広大なキャンパスなどに圧倒され、生活の一つ一つの、思い通りにならないことに出会うたびに、苛々としていました。また、日本という、自分の母国にあって、管理されつつも「守られている」ことの便利さを改めて感じました。

SIIT での英語での講義は最初なかなかついてゆけずに苦戦しました。予習しようにも間に合わない、講義中、講義内容を聞き取りたくても聞き逃してしまう、復習しようにもノートが読めない…。そんな慣れない生活の中で、わたしを救ってくれたのはタイ人の友人達の存在でした。具体的に、ノートを貸してくれたり、lecture note のコピーを取ってくれたりということもありますが、何よりもわたしを強く励ましたのは、彼らの笑顔でした。何らか事あるごとに、その都度、タイ人学生の笑顔、優しさ、親切さに触れ、喜ぶというよりは驚きました。これまで日本で外国人と接する際にわたしはこれ程までに親切に出来たのだろうか？とこれまで外国人だけでなく日本人に対しても、不親切できたわが身を恥じ

ました。

外国人留学生の受け入れを広く行っている SIIT では、タイ人だけでなく、ドイツ、フィンランド、アメリカ、台湾など、各国からの留学生と接する機会にも恵まれました。各国留学生が集まって、それぞれと話をしていると、外の国、またその国民の印象と言うのは、住んでいる人の言葉からはそれまで得ていた知識と随分隔たりのあるものだと感じました。そうして、慣れない英語で、それでも必死に自分の思いを伝えながら友人たちと接していくうちに、言葉の主語を省いて話せる日本語の特権からか、これまで何の疑問も持たずにきた、自己の主張を曖昧なものにして、主体性を持たず、感情や責任をなすりつけあう日本人の生き方というものに、段々と違和感を抱くようになってきました。

そのようにして、ようやく生活にも慣れた7月も終わる頃、日本の友人からのメールで、これまでと違う感触を感じるようになりました。見えない束縛や、抑圧、見栄など、混沌とした感情に取り囲まれて窮屈そうな彼らの姿が見えてきたのです。また、同じように、日本ではそのように暮らしていた自分の姿をそこに見て、便利であることに甘えた、自分の行き先さえも見失ってしまうような、この息苦しい生活に我慢して暮らしたくはないと思うようになりました。

丁度その頃 mid-term exam があり、内容は難しく、結果は惨憺たるものでした。今まで大学から与えられた課題をこなすだけの受身的な勉強の仕方をつくづくと後悔し、そして、毎日をアルバイトや、遊びに費やすことで忙しくして、自分の気持ちと向き合うことなく、受身でテストを待ち、ただ時間をやり過ごしてゆく、日本での生活をひどく無意味なものに感じました。

Final-exam も近づいたある日、ある講義の担当教授から「どうして留学にタイを選んだのか？」と問われました。わたしは、「日本はもう途上国でなく、人の手による仕事が少ない。多くの若い人達が働かず、何もせずに家に居ます。でもタイはまだ途上でそして人々は元気で、経済も slow でない、わたしはそんなタイは実際どんなものであるか見てみたかったです。そうして、タイは随分、日本より”いい”という印象を受けます。」と答えました。すると彼は「君はこの国のいい側面しか見ていない。どんなことにもいいことと悪いことがある。...」と続けられました。

もう少し、かつてのアジア経済危機（1997年）のことなど聞いてみたいと思ったところで、自分の語彙が足りないことに気付きました。話したいことには足りない語彙、日常会話においてさえも論理的なゲームを楽しむ西洋人と会話の出来ない思考のパターン、使えない無駄な英語ばかりが入っている自分の知識は、まるで自分の生活そのもののようにだと

思いました。

どうやったらもっと話せるようになるのか、何をどんな風に考えればいいのか...、試行錯誤しつつ、日本での生活を省みつつするうちに、帰国の日がやってきてしまいました。

4).今後へ

タイで暮らしてみても思ったことは、日本はいい意味でも悪い意味でも、閉鎖的な国であるということです。旅行としてでなく、実際にタイに暮らすことにより、日本を相対化して見られることで、自分が見失っていたものや、目指すものが見えてきました。

自分の思ったことを誤解なく伝えられる英語力と、それから、コミュニケーション能力、使える技術を身に付け、社会貢献が実現できるよう、勉強を続けて行きたいと思います。